

◆本郷
(東京都文京区)

読売新聞記者 中西 茂



落第横丁の看板。道路の反対側が東大キャンパス。

国の重要文化財「赤門」は東京大学のシンボルである。地下鉄本郷三丁目駅を出ると、進学塾「赤門会」の看板が目に見え込んでくる。赤門前の本郷通り沿いは、「赤門不動産」「赤門美容室」「赤門アピタシオン」(マンション)、「赤門もち」と、赤門づくし。写真スタジオには、皇太子妃、

雅子さまの東大在学中の写真やノーベル物理学賞の小柴昌俊博士の写真が掲示されている。

赤門を右手に見ながら北にしばらく進み、本郷通りを西に折れると落第横丁がある。横丁の店を紹介する看板に「新人類 そば大好き」という宣伝文句を見つけた。この言葉からよときの流れを

感じるが、横丁自体はもともと古い。かつては飲み屋が多く、「お酒を飲んではかりいと落第する」と言われて、この名が付いたという。途中の酒店には、落第を意識した焼酎「合格横丁」も販売されている。

さて、この横丁をしばらく歩くと和風旅館「鳳明館」にたどりつく。本館は築百年を超える国の登録有形文化財。その歴史ある建物で、素泊まりコンパをする学生たちが、ここ数年、増えているという。学生下宿の時代から三代目邦夫さん(五六)によると、東大の合唱サークルから提案されたのが最初。演奏会の後、スタートの遅い打ち上げでも帰りの時間を気にせず。近年は、利用が他大など勉強のための利用も多い。「最近の学生さんはよく勉強



明治時代からの歴史を刻む鳳明館。

します」と小池さん。料金は一人五〇四〇円で、素泊まりと言っても、おでんがサービスされる。すきつ腹で飲んで悪酔いしないようにという予防策だが、学生たちには暖かいサービスである。

本郷かいわいはかつて一大旅館街だったが、いままでは一〇軒ほどに減った。街が修学旅行客であふれた時代も、鉄道のストに備えたサラリーマンの定宿だった時代もあった。農協の陳情団や老人会、外国人……様々な客を受け入れてきた老舗旅館での学生の素泊まり人気。小池さんは「ネットでもコミュニケーションできる時代だが、やっぱり生身のふれあいに飢えているんじゃないかな」と分析してみた。

東大周辺の約一七〇店舗が加盟する本郷商店会では、「地元の商店に親しみを持ってもらおう」と、二〇〇六年から受験生応援キャンペーンを展開してきた。これまでに、お汁粉を振る舞ったり、鉛筆を配ったりしてきたほか、店ごとに、サプリメントやDHHAたっぷりのつみれなど、合格と結びつけた商品も工夫。二〇〇九年からは、二次試験当日、合格祈願のエントリーシートを提出し、合格するとお買い物券と現金計一万円がもらえるサービスも登場した。

一〇〇人ほどの応募がある。「びりびりした中で当日の申し込みは気の毒」と、二〇一一年はウェブからも応募でき



合格祈願の絵馬であふれる桜木神社。

るようにする。エントリーシートは、近くの桜木神社に奉納される。東大合格をめざす漫画「ドラゴン桜」でも登場した天神様だ。

商店会の会長で、薬局を営む川又靖則さん（五六）は、受験当日に体調を崩して店に飛び込んでくる受験生を何人も見てきた。「あのときはお世話になりました。昨年は失敗しましたが、今年は無事合格しました」といったお礼の手紙をもらうこともある。

本郷商店会では、商品の宅配サービスを請け負うNPO「街ing（まっちんぐ）本郷」を設立した。高齢者や子育て世代にありがたいだけでなく、実は商店にとっても人手不足を補うのに好都合だという。料理教室の開催など、NPOの活動は今後、さらに広がりそうだ。

大学との関係はどうか。「この間も、東大からの要請で、ゴミの堆肥化用にぬかを五〇キロ届けたばかり」と鮮魚店を営む代表の長谷川大さん（四三）。知恵とマンパワーの両面で、大学が頼りにされていることは言うまでもない。